

「薬草を親しむ」 No.006

トリカブト（カブトギク、カブトバナ）

牧 幸 男

夏山シーズンも終わりに近づき、山のお花畑が寂しくなる頃、タカネトリカブトの青紫色の花が目立つようになる。まだシルバー層や山ガールもいなく、登山の大衆化は進んでいなかった頃の話である。私は若い頃、よく山登りをした。当時の山小屋の営業は、夏場と紅葉の一時期のみで、小屋の人はお花畑でヤマトリカブトが咲き、尾根でトウヤクリンドウの花が咲きはじめると「山仕事も終りが近づき、山麓の我が家へ郷愁に駆られる。」と言っていた。数年前の9月、上高地を訪れた時、登山客や一般の人々のあまりの多さに驚いた。しかし、岳沢まで足を延ばすと登山者は少なく、そこにはヤマトリカブトの花が咲き誇っており、自然の姿は少しも変わっていないことを嬉しく思った。



撮影：上高地（岳沢）

トリカブトは中国原産で、キンポウゲ科の有毒植物である。わが国では毒空木、毒芹と並び「日本三大有毒植物」の一つとされている。この仲間は、北半球の温帯から寒帯に約300種あり、2年生の根をもつ狭義のトリカブト類と、多年生の根をもつレイジンソウ類に大別される。わが国には約30種が自生している。花の色は紫色のほか、白、黄色、ピンク色などがある。

トリカブトと聞くと、怖い植物のイメージを抱く。その理由は、狂言の「附子」の内容や春先の山菜取でニリンソウと間違えて中毒になったり、平成3年に発生したトリカブト保険殺人事件などの記憶があるからであろう。一方で、トリカブトの花の変わった形態や美しい青紫色の花の色を好む人も多い。

トリカブトは我が国では古くから観賞用に栽培されてきたキンポウゲ科の植物である。茎は直立し、高さは1m以上に成長し茎は平滑な円柱形である。葉は互生で有柄、掌状に深裂し、この深裂はほとんど基部にまで裂けている。秋の頃、枝の先や上方の葉腋に円錐花序をつけ青紫色の大形で美しい帽子状の花を開く。根は倒卵形の塊根で地中に真直に伸びている。トリカブトの変種は多く、『新訂牧野新日本植物図鑑』にはヤマトリカブト、タカネトリカブト、ホソバトリカブト、ミヤマトリカブト等14種も収載されている。園芸種のみならず、漢方薬として人類のつながりは深いのである。

特に、人類はこの有毒物質の利点を利用し矢にトリカブトの液を塗り、狩猟や狼退治、鯨捕獲等に使った。時には、軍事目的で使ったこともあった。また、歴史上では古代ギリシア・ローマ時代から政治上や姻戚関係の謀殺に良く使われた。このためギリシア神話では「王子セテウスの物語」、「地獄の番犬ケルベロスのよだれから生まれた植物」、「魔女の女神ヘカターを司る花」とされ庭に植えてはならない話が伝わっている。わが国ではアイヌ民族がこの毒を利用しことや「恋に狂った娘の物語」が伝えられている。

一方、薬用の使用も盛んであった。特に『神農本草経』（250～280 頃編纂頃）や陶弘景の『名医別録』



(500頃)には詳しく記載されている。わが国では『古事記』(712)、『日本書紀』(720)、『風土記』(713)には登場せず、『本草和名』(918)、『倭名類聚』(937)に植物名の記載はあるが、効能は付してない。江戸時代になり様々な利用法が紹介されるようになると、薬用利用が始まった。特に、^{ぶす}狂言の附子に登場すると、人々に膾炙され怖い植物と知られるようになった。有毒植物であるのか、歌題の対象になるのは、明治以降である。

とりかぶの 毒草液を 搾りゐる かたへに^{つよ}勁き 夜を^{ぶす}遂げしめよ 生方 たつゑ

滝道や むらさきふかき とりかぶと 及川 あまき

日本名の由来は「花の形が舞楽の伶人の兜に似ているからで、別名の兜菊、兜花も同様である。漢名は烏頭、双鸞菊は共に別物である。」と牧野富太郎博士は述べている。その他の名は、専ら生薬名には^{ろうらんこ}附子、^{せんうず}天雄、^{じゅんぶへん}漏籃子、川烏頭、炮附子、熟附片、白附子、頂鉋子等多数がある。いずれも治療目的に応じた名称である。学名は *Aconitum chinense* で、属名は語原不明であるが、ギリシア語の投槍が由来とも言われている。種小名は *chinense* のため中国種のように思われるが、わが国が原種とされている。また、ヤマトリカブトの種小名は *japonicum* (日本産)、ホソバトリカブトは *senanense* (信濃産) が付され、我が国に深い関係があることがわかる。

薬用に利用するのは塊根^{くわいこん}部で、肥大した球形の主根(親根)の両脇に子根が寄り添って付いており、これらの子根が花の時期に丸々と太り、それに代わって親の主根委縮してしまう。この肥大した子根が生薬となる。実際に生薬として使う場合は毒を減ずる^{しゅうち}加工(修治)が行われる。修治は現在3種類行われているが詳細は省略する。生薬名は塊根の子根を。「附子」、親の部分を「烏頭」、子根のつかない単体の塊根を「天雄」と呼んでいる。医療に使う附子の呼び方は「ブス」と呼ぶが、トリカブトに苦さがあまりにもひどいので、顔の表情おかしくなることを指すとも言われている。

この生薬、単味で使うことはなく、漢方で主として鎮痛、強心、興奮剤として新陳代謝機能が弱っている場合使用する。ヨーロッパでは毒性が強いことから歯痛、痛風、関節痛など外用薬剤に使用してきた。トリカブトの使用は、専門家のみに許され、素人は絶対使ってはならない。

「名医と竹庵は附子の匙加減で決まる」、「薬は両刃の^{やいば}刃」の言葉が残るよう親しみと怖さが共存する植物である。

トリカブトの葉は、芽吹き^{めぶき}の頃、ニリンソウ、ヨモギ、ゲンノショウコの葉の形が似ているので、誤食に注意しなければならない。

花言葉は「騎士道」「栄光」「人嫌い」「厭世家」「復讐」である。

【トリカブトの生薬】



附 子



修治した塩附子

